④ 水泳に生きた私

私は紀ノ川が流れる橋本市古佐田で生まれました。父は前畑福太郎、母は光枝といってとうふ屋をやっていました。両親は朝早くから仕込みを始め、兄弟みんなで仕事の手伝いをしてきました。

私は生まれたときから病気ばかりしていて、からだが弱かったらしく、「これでは大きくなるまで育たんかもしれんなぁ。」と父も母もひそかに心配していたほどです。「なんとかして秀子をじょうぶな子にしなければ。」と、私がまだ三、四歳のころから両親が紀ノ川の妻の浦へ連れて行って、背中にのせて泳いでくれました。こうしていつのまにか水泳をおぼえた私は川で泳ぐことが楽しみになり、弱かったからだもいつしか強くなっていきました。

小学校の三年生のとき、校長先生の考えで、夏休みに水泳指導をおこなうことになりました。その最後の日に校長先生が言いました。「今日、練習の成果をみるためにも試験をしよう。泳

げた距離によって白いはちまきに黒い線を入れよう。また、千メートル以上泳げたものは来年から水泳部をつくって選手にしてやろう。」このとき、「前畑、泳いだのか。」と、校長先生は黒い線の五本入ったはちまきを四年生以下では私一人だけくれました。

四年生のとき、校長先生ほか四名の先生方が水泳部の指導をしてくださいました。当時小学校にはプールがなく、先生方が紀ノ川の「わんど」とよぶ、流れのおだやかなところに数本の杭を打ち込み、スタート台とターニング台をつけ、コースロープは縄を張っただけの二十五メートル五コースの天然プールを作ってくれました。先生方は正式な泳ぎ方を大阪まで習いに行かれ、私たちに泳いでみせてくれました。それからベルリンオリンピックのときまで私は平泳ぎ一筋にがんばりました。五年生では百メートル平泳ぎに挑戦して日本新記録を出し、六年生になると二百メートルに出場して、これも日本新記録を樹立して、とんとん拍子にはずみがつきました。そのころの私は、からだもほかの女子生徒より大きく、たくましくなっていました。それだけに泳ぐのも楽しく、自分から進んで練習をやっていたからこそ記録が出せたのだと思います。

「はじめて水泳大会に出場して優勝したんやからたいしたもんや。」「前畑の女の子が水泳で日本一になったんやってね。」と、町の人たちが学校の行き帰りに私の方を振り返って見てくれました。私はそのように見られることにうれしさを感じていました。それだけにもっと速く泳げるようになろうという気も強くなり、自然に今まで以上に練習にも力が加わりました。ところが、厳しい練習の繰り返しでからだはくたくたになり、どんなに悲しくなって泣いたかもしれません。

そのころ、家に帰ってくると、母がいつも言ってくれた言葉があります。

「そんなことぐらいでへこたれてしまってはいかんよ。おまえは、自分が好きで水泳をはじめたんだからね。やりはじめたことは最後までやり通しなさい。水の中で泣いてもいいから、苦しみに負けないでがんばりなさい。」

はじめ私は「また言ってるわ。」という気持ちで聞いていました。しかし、何度も聞いているうちに母の心がわかってきて、私の選手生活を支えてくれたのだと思います。

歯をくいしばって練習を続け、日本の代表選手としてはじめて海外に遠征したのが十五歳のときでした。ハワイで開かれた汎太平洋女子オリンピック大会へ出場し、百メートル平泳ぎで一着、二百メートルが二着で、金と銀のメダルをいただいて橋本に帰ることができました。

高等科を出るとき、名古屋の椙山女学校にプールができて、その女学校の校長先生が、「うちの学校へ来る気はないか。」と言ってくださいました。しかし、病気がちな父は思うように働けず、父を助ける母のつらい仕事ぶりを見ていると、とても家を離れて進学し、水泳を続けられるような状態ではありませんでした。そんなとき、小学校の西中校長先生が家に相談に来られ、私の希望と水泳選手としての可能性にかけてみるよう両親を説得され、橋本を離れて名古屋へ行くことになりました。そして、ロサンゼルスのオリンピック大会に向けて練習を続けました。毎日一万メートル泳いでいた十六歳の年、一月に脳溢血で母が突然死に、五ヵ月後の六月に後を追うようにして父も亡くなりました。

悲しみのどん底に落ち込んだ私は、水泳を続けることが考えられない状態になってしまったのです。詳しい事情を手紙に書いて、女学校をやめさせてほしいと椙山校長先生に送りました。椙山校長先生はその手紙を全校生徒に読んで聞かせたそうです。「私たちだけの前畑さんではなく、日本の前畑さ

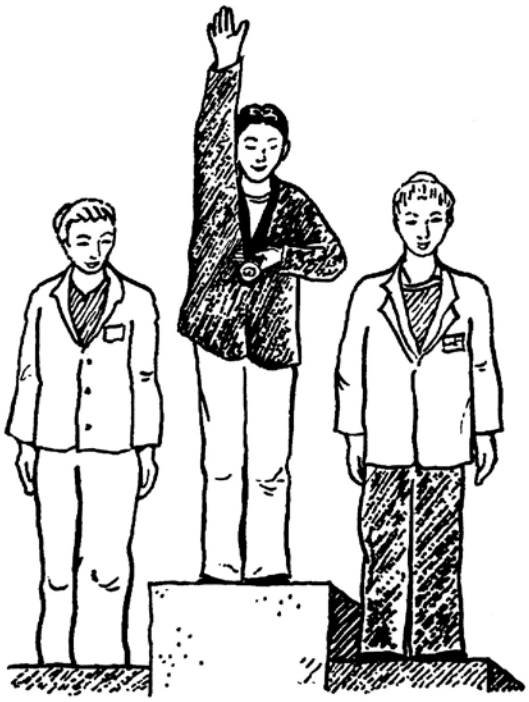
んですよ。」「そうです。ですから校長先生、前畑さんをぜひ学校へ連れ戻してください。」と、校長先生や生徒たちから学校にもどるようにと言ってきました。そして、橋本町長さんや西中校長先生からも同じことを聞かされました。

「お父さんやお母さんは、あなたがオリンピック選手になるのをどんなに楽しみにしていたかしれないんだよ。それなのに、いま水泳をやめてしまったら、かえって親不孝になってしまうじゃないか。」

これらの方々のご意見を受けて、兄弟と親戚の人たちも集まって相談してくれました。そして、私が水泳を続けるために、兄さんがお嫁さんをもらうことになり、みんなの好意に助けられてふたたび椙山女学校にもどることになりました。練習を開始したのですが、心には両親を失ってしまった深い悲しみがまだ残っていました。そのうえ、半年以上もなんのトレーニングもしていなかったので、いくら泳いでもからだが重くてしかたがありませんでした。

もう一度必死にやってみようと覚悟をきめたのは、やはり、「お父さん、お母さんも助けてやるから。そして、いろいろな方にあと押ししていただいているのだということを忘れないように。」と言ってくれていた母の言葉に支えられてのことです。それをばねにして、練習に練習を重ね、自分を鍛え

てきて、やっと一人前になれたのです。

ロサンゼルスのオリンピックでは、二百メートルで〇・一秒差で二着となりました。このとき私は十八歳になっていました。帰国すると、四年後のベルリン大会に向けてのことばかり。当時は十八歳で女学校を卒業するとお嫁に行ったものです。どうして、「私だけが二十二歳まで泳がなければならないのか。」と悩んだこともありました。このときも、母の言葉に支えられて乗り切れたのです。

私にとって最後の競技となったベルリンオリンピック大会で、二百メートル平泳ぎに優勝。これは河西アナウンサーの「前畑ガンバレ、前畑ガンバレ」の放送でいまだに語り継がれています。私に水泳の道を開いてくださったお二人の校長先生との出会い、泳ぐことを許してくれた父と母や兄弟、私をあたたかく見守ってくださった方々がいなかったならば、水泳選手としての前畑秀子はもちろん、いまの私もいないにちがいないと思うのです。